京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十三卷　第四號

大正十年十月一日發行

論叢

所得稅の弱點　法學博士　神戸正雄

社會的法的經濟學の考察　文學博士　米田庄太郎

利潤の經濟的及び道德的性質　法學博士　田島錦治

農業勞働問題　法學博士　河田嗣郎

時論

地方稅の整理を論ず　法學博士　小川鄕太郎

說苑

家計論の地位に就て　法學士　作田莊一

井リヤム・タムスンの分配論　經濟學士　堀經夫

雜錄

獨逸側より見たる聯合國の對獨經濟政策　法學士　小島昌太郎

世界戰爭と伯林の人口　法學士　汐見三郎

社會的法的經濟學の考察（二完）

（獨逸經濟學に於ける一新傾向）

米田庄太郎

余は本雜誌本年六月號に於て公にせる本論文(一)に於て、デイールの著作により獨逸經濟學に於ける一新傾向として、社會的法的經濟學の根本思想、及び其の發生を概論し、夫れより引き續いて其の根本思想の批判的考察を試みるつもりであつたが、「新理想主義歷史哲學」を出來るだけ早く完成して、余の「社會學體系」の出版に着手せんが爲め、該書の著作に殆んど全力を注いで居るが故に、遺憾ながら本論文を引き續いて公にすることが出來なくなつた。尙ほ今後も豫定通りに本論文を公にする暇は、少くなも當分得られそうにないが、されはとて本論文の締りをつけずに棄てゝ置くのも、讀者に濟まないと思ふから、此處にデイールの社會科學の概念を批評して、それで一先づ本論文を完結する事とする、讀者之を諒ぜられよ。

第四節　デイールの社會科學の概念の批判

夫れ本論文(一)に於て述べし如く、デイールは國民經濟學を一の社會科學として確立せんとするのであるから、同氏の國民經濟學の概念の學的性質は、つまり同氏の社會科學の概念によりて決定されるのである。然るに同氏の社會科學の概念は、從來の種々なる社會科學の概念とは異なれる處がある。殊にマールブールヒ派の社會科學の概念、一層適切に云へはシュタムラーの社會科學

の概念とは、根本的に異なれる點がある。そうして余は此處に特に其等の點に注目して、同氏の社會科學の概念を考察し、同氏獨特の見解と思はれるものが、認識論上、或は學問方法論上、如何程の價値を有するものであるかを、批判して見たいと思ふ。

（一）自然科學と精神科學

却説從來獨逸の學界に於て、一般に行なはれて居た科學の分類は、つまり科學を自然科學と精神科學とに大別するものであつた。併し近來此の分類を以て不完全な、或は不滿足なものと見て、新しき分類を立てんとする幾多の新見解が、續々現はれて居るが、其の中にても殊に學者の注意を引いて居るのは、西南獨逸派の自然科學と歴史科學、又は自然科學と文化科學との分類説及びマールブールヒ派の自然科學と社會科學或は目的科學との分類説である。然らばディールは如何なる點に於て、其等の科學分類説を不完全なものと認め、そうして新たに氏の分類説を立てんとするのであるか。先づ自然科學と精神科學との分類に關する同氏の見解を調らべて見よう。

今ディールの説く處によれば、自然科學とはつまり人間の働きを加へることなしに生起する一切の現象の科學、人間が只受働的な、只之を眺めて居る丈の役目を演ずるに過ぎない、一切の現象の科學を包括するものである。其等の科學は外界の現象を其の法則的進行に於て認識するを學び、箇々の現象間に存在する結合を説明することを、研究の目的とする處のものである。人々が直

ちに自然科學として指示する物理學、卽ち自然に於けるエネルギー論の如き、基本的科學に付て見るも、又は天界の諸現象を研究する天文學、地球の諸現象を取扱ふ地理學及び地質學、生命現象を研究する生物學の如き、餘他の自然科學に付て見るも、吾人は人間の意志から獨立し、確乎たる法則的進行に於て、吾人に與へらる處の勢力及び過程が、常に取扱はれて居ることを見るのである。

併し又右の自然科學とは異なれる、他の科學の一部類がある。そうして之を精神科學と總稱することに付て、色々異論があるに拘らず、今日も尙ほ其の名稱を固持せんとする人々がある。今日此の名稱を選ぶ人々の中で、特に注目すべきはデイルタイである。

デイルタイ (Dilthey) の說く處によれば、生活其の物の諸職分から自から生長し、對象の共同性によりて相互に結合される處の諸智識の一部類が發達した。是れ歷史、國民經濟學、法學、國家學、宗敎學、文學及び詩歌の研究、空間藝術及び音樂の研究、哲學的世界觀及び體系の研究、終に心理學等の諸科學である。そうして總て此等の科學は人類と云ふ同一の大事實に結び付くものである。此等の科學は右の大事實に關して記述し、說話し、判斷し、概念及び理論を構成するのである。デイルタイにありては、「人類」と云ふ事實は直ちに精神科學を限界附ける標準として用ひられて居る。「精神科學は常に人類、或は人間的、社會的、歷史的實在といふ同一の事實に結び

付けられ、此くて先づ此の智識部類を、其の人類といふ同一の事實に、共同的に結び付けられることによりて決定し、之を自然科學より限界附ける可能性が生ずる」。「されば此の體驗し得られるものに於て、生活の總ての價値が含まれ、此の體驗し得られるものゝ周圍を、歷史の外部的騷ぎの全體が回轉する。此處に自然が全く知らない處の諸目的が現はれる。意志は發達及び形成を成就し、夫れに於て創造し、又主權的に吾人に於て活動する精神的世界を完成する。そうして只精神的世界に於てのみ、生活は其の價値、其の目的及び其の意義を有するのである。」デイルタイは又自然科學と精神科學との區別を簡單に左の如くにも說述して居る。「自然科學と精神科學との區別は對象の構成される傾向に存する。或は夫は兩者が夫れ夫れ形成される方法に存するのである。精神科學にありては、會得に於て精神的對象が生起し、自然科學にありては、認識に於て物理的對象が生起するのである。」此くてデイルタイに從へば、自然科學の對象たる自然は、精神の作働から獨立して存在する實在を包括するが、人間が作働して其の特質を捺印する總てのものが、精神科學の對象を構成するのである。

デイールは自然科學と精神科學との區別、殊に此の區別に付てデイルタイの立てたる說を、右に述べし如くに解したる後、之れを批評して居るが、其の大畧は左の如くである。

今デイルタイが自然科學と非自然科學との間に存する一定の對立を、正當に又銳く指摘して居

ると云ふこと、及び、一般に實質上両者の對象を正當に表現して居ると云ふことは疑はれないが、併し自然科學及び精神科學と云ふ名稱に付ては、吾人は夫れが果して正當であるや否やを、疑はざるを得ないのである。先づ自然科學に對する他の科學部類を、精神科學と稱することが、さなきだに後者を以て前者よりも高等なる科學であるが如くに見る偏見を、一層强めて居ると思ふ。精神科學と云ふ名稱は、之れによりて包括される科學が、特に精神的なる働きを要求し、之れに對して自然科學と稱せられるものは、只事實的なるものゝ觀察或は探究を、目的とするだけのものの如くに考へる謬見を生ずる原因となつて居ると、思はれるのである。もつとも此の名稱を選べる人々が、決して両者の間に此の如き位階別を立てんと考へて居るのでないことは確かである。併し實際上右の謬見が常に起つて居る。尙ほ又精神と云ふ語は、非常に色彩の多い言葉であり、あらゆる表象が之れに結び付けられ、實際上甚だ種々なる意味に用ひられて居る。併し此等の事は敢て問はないとしても、此處に科學を自然科學と精神科學とに分つに付て起る最大の疑がある。夫れは精神科學は若し此の名が一般に意義を有す可くは、先づ第一に人間精神の科學を包含せねばならぬ、かくて心理學をも含まねばならぬでないかと云ふことである。そうしてディルタイは明らかに心理學を精神科學中に數へて居る。併し心理學は自然科學に屬することは、今や一般に認られて居る事實である。最とも單純なる心理的過程や、人間の元素的感覺及び表象や、苦感及

び快感なぞが取扱はれて居る處では、まさしく自然的過程が探究されて居るのである。所謂心理的現象なるものは、身體的現象と同じく「自然的」である。されば自然科學的方法が、心理學的研究に於て甚だ重大なる役目を演ずるのは、毫も怪むに足らないのである。エッビングハウスに從へば、一切の心理的事象の徹底的な確乎たる法則性と云ふことは、心理學の一切の研究の基礎である。實驗的な自然科學的方法が、心理學に於て今日見るが如くに重要視されることが、果して正當であるや否やは別として、とにかく人間の精神的及び心理的生活の研究領分は、大なる廣さに於て自然科學に屬することは明らかである。蓋し今日心理學に於ては、吾人は人間の一定の自然的素質及び性質を、對象として考察するからである。

輓近の哲學に於ては、此の自然科學と精神科學との區別は、強き反對を惹き起した。殊にリッケルトは此の區別を排斥して居る。彼の論ずる處によれば、「何故に心理生活が身體的存在よりも、より少なく自然的なる或物であるかは解し得られない。隨ふて又自然科學と云ふ語は、心理學にも適用さる可き筈のものである。そうして此の如き言葉の用法は、今日心理生活は物體界と同一の方法に從ふて、即ち普遍化的に、又其の法則的結合に關して、夫れが價値或は超自然的なるものとの關係によりて、其の特性に付て保有する一切の意義から獨立して、研究されて居ると云ふ、實際の事情に適合するであらう。心理生活も亦物體的自然の如く夫れ自身で作働し、又消

滅するものである。心理生活は善惡及び總ての其の他の價値對とは關係なしに、考察され得るのである。心理生活は其の普遍的概念に從ふて、物體界と同樣に充分に文化、藝術、道德等から區別される。此くて夫れは物體界と同じく又一の「自然」である。そうして物體に付ても同樣に、心理生活に付ても、自然科學は成立しなければならないのである。」リッケルトは以上述べし如くに自然と精神との對立は、科學的概念構成及び叙述の論理的調整に對しては、全く使用し得られないものであると云ふ結論に到着し、「精神科學と云ふ語は、心理學が論理的意味に於て、一の自然科學に形成された以後、まさしく誤解と非難とを招くものである」と云ふて居る。

併しリッケルトの右の反對に拘らず、シュツムプ（Stumpf）は本質的な修正を加へて居るが、矢張り自然科學と精神科學との科學分類說を固持せんと努力して居る。そうして同氏は舊區別及び舊特質附けを保持するは、便宜であると考へるが、しかも此の區別を不完全と認めざるを得ないので、此くて同氏は自然科學及び精神科學に對して前科學（フォルヴィセンシャフテン）及び後科學（ナツハヴィセンシャフテン）と稱する處の、特殊的諸科學の一列を、之れに附加して、其の不足を補はんとして居る。

シュツムプに從へば、自然科學は物體界或は物質の科學にして、精神科學は思惟對象に高められたる、心理的機能の總體を包括するものである。併し自然科學にも亦精神科學にも屬しない特殊科學として、シュツムプは先づ所謂前科學（フォルヴィセンシャフテン）の一列を指示し、之を認識論と云ふ名稱の下

に包括し得るものと考へて居る。そうして同氏は之れに屬するものとして、先づ現象學(フェノメノロギー)即ち現象の科學を擧げ、次に構成物學(die Eidolbgie)即ち構成(ゲビルデ)物の研究を擧げて居るが、此等の學はつまり思惟の實質的條件を取扱ふ可きもの、殊に概念論及び價値論を含む可きものと見做して居る。更に同氏は前科學の一種として一般的認識論なるものを擧げて居るが、夫れはつまり認識の一切の領分に於ける關係概念を、對象となす可きものであると見るのである。そうして同氏の關係概念と云ふは、例へば類似、同等、增上、論理的及び事實的依存、全體と部分との關係等の如き概念である。併し其等の前科學の外に又後科學(ナッハヴィセンシャフテン)と稱すべきものがある。夫れは即ち形而上學である。形而上學は共同的法則の問題及びさきに區別されたる一切の對象の統一的結合の問題を、取扱ふものである。要するにシエツムプは種々なる特殊科學の全列を附加して居るが、しかも矢張り根本的には舊區別を、其の儘に保持せんとするものである。

ディールが、自然科學と精神科學との舊分類に付て抱く見解は、以上述べしが如きものであるが、然らば同氏は西南獨逸派や、マトルブールヒ派の新分類に付て、如何なる見解を抱いて居るか。

(二)　自然科學と歷史科學、又は文化科學、又は目的科學、

今西南獨逸派の科學分類論を、最ともよく展開したるはリッケルトにして、同氏は方法論の上

から見て科學を自然科學と歴史科學とに、又對象の上から見て、之を自然科學と文化科學とに別たんとするのである。そうして又両方面からの考察を結合して、科學の最とも重要なる區別は自然科學と歴史的文化科學との區別であると見るのである。

リッケルトの論ずる處によれば、文化科學を自然科學より區別する實質的要素は、價値關係或は價値に結び付けて考へると云ふことである。つまり自然の價値無關係考察(ヴェルトフライ・ベトラハツング)に對立される價値考察(ヴェルトベトラハツング)である。「方法的には、自然とは特殊的なるものに對して、普遍的なものに結び付けて考へられたる實在にして、實質的には價値に結び付けられ、意義を認められる文化と區別して、一切の價値關係から離して考へられたる實在である。」文化科學は其の價値關係の爲めに、普遍的概念の體系の下に包攝されるを許さずして、其の一度的箇性的生成に於て、考究されねばならぬ一の科學的叙述を要求す可きである。

リッケルトは右の如く自然科學に歴史的文化科學を對立されるのであるが、然るにシュタムラーは自然科學と目的科學との區別を立てんとするのである。そうしてシュタムラーにありては、右の二部類を區別する決定的標準は、人間の意欲である。同氏は「經濟と法律」の一部に於て、既に「此の部に於て試みたる研究の結果は、一切の人間的意欲に妥當する。夫れは完結せる方法的構造に於て、自然科學に對立する一の目的科學の基礎として統一的に結合される。自然科學は知

覺の世界を取扱ふ可きものにして、確乎たる普遍的妥當的原則に從ふて、之を征服せんと企だてるのであるが、目的科學は目的の世界を支配するものである」と述べて居る。

併しシュタムラーが右の區別を一層深く確立せんとして居るのは、「法學の理論」に於てゞある。同書中「自然科學と目的科學」と題する一部に於て、同氏は左の語を以て自然科學と精神科學との區別に反對して居る。「併し自然科學も亦人間の精神の業及び成果であつて、而して夫れ以上の學的考究も、あるがまゝで精神を其の對象とするのでなく、此くて其の精神との關係は、夫れに本質的なる對象を十分に決定するには足らないのである。」シュタムラーは更に詳しき說明を加へて居るが、此處には只其の要旨を示すと思はれる、左の語を引用するだけに止める。「吾人は自然とは、空間及び時間に於て生成する一切の知覺の總體にして、確乎たる一樣な思惟進行に從ふて、統一的に把捉し得るものであると解する。そうして此處に吾人が依て以て箇々の現象を調整する基本概念の中には、手段を具へたる目的を設定すると云ふ概念は見出されない。目的及び手段の概念は、知覺が依て以て科學的に認識され得る思惟系列の外に存する。此等の概念は實現さる可き對象に關するものにして、只意欲の前以て記述されたる意識內容に於てのみ現はれる。されば目的の概念は、自然認識の基本概念の如く、一の範疇を意味するものでなく、知覺の基本方針と並行する意識特有の一基本方針を意味するものである。」

以上述べしが如き自然科學と歴史科學或は文化科學或は目的科學との區別は、自然科學と精神科學との舊區別に比して、勝れたるものであることは疑はれない。其等の新しき區別を立てんとする人々が、其の組織的研究によりて舊區別の缺陷を證明した功績は、大に讃賞す可きものである。そうしてリッケルトやシュタムラーの諸説の多くは、實質上一般に承認さる可きものと思はれるが、しかし彼等の案出せる文化科學とか、目的科學とか云ふ語は、あまり適當でないと考へられる。此等の語は啻に誤解を招く恐れあるのみならず、更に精密と、自然科學に對する差別を確立す可き、明瞭なる區別特徴とを缺いて居る。吾人若し自然科學と歴史科學とを區別せんか、總ての自然科學も亦歴史的に研究され得ると云ふ事實は、既に不分明及び誤解に導かねばならぬ。箇々の自然科學の歴史的發達を研究する諸學科は、當然歴史科學に數へらる可きである。併し他方に於ては、彼等は其の對象に從ふて自然科學に屬する。又歴史と云ふ語は、自然科學に對立する一の明亮なる名稱を提供するには、あまりに無色彩で、茫漠たるものであると思はれる。

同樣な疑問は又文化科學（クルツアルヴィセンシャフト）と云ふ名稱に對しても起る。クルツアと云ふ語はコレレ、卽ち土地に手入れすると云ふ語より起れるものであるから、其の起源に從ふて此の語と結び付けて、屢々一定の人間的技能が表示される。例へば一定の技術的方法を表示し、まさしく自然科學的知識に基いて行なはる可き山林經濟、農業等の如きものである。ヴントも亦既にクルツアと云ふ語の

二重の意義を指摘して居る。そうして文化科學と自然科學との對立が、嚴密に理解される場合には、其等の技術的學科は總て文化科學に屬せずして、自然科學中に數へられるであらう。但しリッケルトにありて事情は異なつて居る。同氏は文化の概念を甚だ廣義に解し、人間の物質的技術的業(ワザ)の其等の種類をも、矢張り文化の概念中に包攝して居るのである。リッケルトの意味では、文化は夫れ自身に、又其の生長するが儘に、放任される自然に對立するものとして、把捉さる可きである。そうして同氏は明らかに左の語を附け加へて居る。「更に文化物(クルツアウグエケデ)の概念の中には、各文化行動に於て、人間に對して手段として、或は目的として考察に入り來る物體も含まれる。そうして是れは必然的である。と云ふは、其等の物體は、其の歴史的に本質的な箇性に於て、精神的過程と同じく、歴史によりて叙述さる可きものであるからである。人間の發明せる器械や、技術の全發達は、まさしく歴史に屬するのである。」尙ほリッケルトは左の如くに述べて居る。「文化科學と云ふ語は、技術的及び物質的文化の歴史的叙述にも亦、適合するが故に、適切なる語である。」そうしてリッケルトの如くに文化の概念を廣義に解する人々は、確かに技術を文化科學の中に取り込むことを、決して躊躇しないであらう。彼等にありては又、文化と云ふ語の意味から生ずる上述の困難は存在しない。併し自然科學の一定の知識の利用に外ならぬ人間の業(ワザ)を、此の科學との結合から切り離すことは、穩當でないと思はれる。

シュタムラーは自然科學的方法を、社會科學に適用することの不當なるを證明するに付て、最大の功績を認めらる可き人であるが、同氏は上に述べし如く、科學を自然科學と目的科學とに別たんとするのである。併し此の見解は、同氏が右の區別に與へる內容上の說明から考へると、許容され得ないものであると思はれる。夫れシュタムラーは目的科學によりて、單に自然法則的事象の外に、社會的協働に於ける人間の目的意識的行爲に基因する、第二の部類の事象を認めんとするだけでなく、此處に目的と云ふ語を、一層限定されたる意味に用ひて居る。同氏は人間の一切の社會生活に對立して、學的に確立される終極的目的として、一の最上目的を承認し、而して此の最上目的からして、過古を裁判すると同時に、又將來に對しても、客觀的に正當なる人間の行爲の爲めに、一の確實なる支柱を設定せんとするのである。そうして此の目的論は學的に、自然法則的因果性と全く同じく、統一的に又確實に基礎附けられる可きものであると考へる。此くてシュタムラーは自然に於ける因果性と、人間の協働から生ずる因果性とを對立させないが、併し一方に於ては自然の因果性と、他方に於ては社會生活に於ける目的性とを對立させるのである。此處に此の點に關するシュタムラーの辯論の要旨を、同氏の語を引用して示して置くが、同氏は先づ左の如く述べて居る。「一の權利を認められる目的設定、及び一の正當と認められる撰擇とは、つまり其の特殊的な場合に於て、目的の一の普遍妥當的法則に適應するが如きものであ

る。そうして權利を認められること、或は正當と認められることを證明する爲めには、合法則的目的設定の條件を形式的普遍性に於て提出し、此くて箇別的な一定の目的設定に、客觀的に正當と認められると云ふ性質を附與する處の、無制約的に妥當する一種の方法が必要である。」そうしてシュタムラーは「自由に意欲する人間の共同生活」の觀念を、評價の最上見地として、又社會的共同生活の最後の目標として提出する時には、其の自由と云ふことを、目的設定の主觀性から自由であると云ふ意味に、解せんとするのである。「自由に意欲する人間の共同生活、是れ社會生活の無制約的終極目標である。夫れは各箇人が他人の客觀的に正當と認められたる目的を自分のものとなす處の、一の人間共同生活の觀念である。換言すれば夫れは法に服從する各人が單に主觀的なる願望に囚はれずして、自由に決斷するや否や、直ちに同意せねばならぬ處の、合致せる存在及び協働の規制の觀念である。」此くてシュタムラーも矢張り社會法則を認めるのである。但し夫れは自然法則から全く區別さる可きものと考へられて居る。要するにシュタムラーの社會法則と云ふは、彼の立てたる社會思想の意味に於て、客觀的に正當と認められると見做され得る處の法則である。「自然法則と同じ意味での社會法則なるものは、全然存在しない。されど現行の、又は考案されたる社會的規定を、法則的として學的に確證することは可能である。そうして此の事は、外部的規定の具體的內容が、自由に意欲する人間の共同生活の觀念に於て、測定さ

れる時に起るのである。夫れは法則的に把捉されたる一の自然現象が、經驗の與料に於ける無制約的統一の觀念に從ふて決定されるのと、毫も異ならないのである。」

此處に吾人はシュタムラーの見解に於て、正當でないと思はれる點に打突かるのである。確かに自然の過程に於ける自然法則的因果性と、人間の目的意識的及び目標意識的行爲に基因する事象の因果性とは、明らかに區別されねばならぬ。併し此等の目的及び目標は常に只特異的な、歴史的に變化し得る隨意的な、又主觀的なものである。吾人が社會生活に於ける一切の行爲に對してコムパスとして使用し得るが如き、一の最上目的の普遍的妥當性なるものは存在しない。吾人は人間の協働によりて惹き起される現象を、人間が受働的實在物として從はねばならぬ處の、自然過程より生起する現象から全然區別せねばならぬ。併し両種の現象の差別はまさしく前者が歴史的に特異なるもの、統一的に學的に强制する性質を有しないものであるが、後者は强く學的に、統一的に決定されたるものであると云ふ事に、基づいて生ずるのである。シュタムラーの社會的終極目的、卽ち自由に意欲する人間の社會と云ふは一の理想にして、夫れは同種の他の社會的理想よりも以上に强制力を有するものでない。其の法則性は學的に證明され得ない。例へは君主道德の立場を社會的理想として主張する人は同じ權利を以て、彼の社會的理想が唯一の正當なる理想と認められることを、願望することが出來るであらう。是れかゝる種類の社會的理想は、結局價

値判斷、箇人的な主觀的確信に基いて立てられるものにして、法則的眞理の意味に於ける普遍妥當性を全く有しないからである。さればシユタムラーは學としての政治を可能と考へるとも、卽ち政治は彼の社會的理想の意味に於て遂行されると考へるとも、吾人は之れと反對に、學としての政治は一般に可能でないと云ふことが出來る。是れ夫れ夫れの政黨の目的は、必然的に相異なつて居て、しかも其等の目的の何れも、學としての優越性を有する事が出來ないからである。吾人は目的の領分に踏み込むや否や、强固なる學問の地盤を離れるのである。社會生活に於てある可きものに對する一の最上ドグマは存在しない。只正當にして、且つ合目的なるものに關して多少基礎附けられたる主觀的確信及び觀念が存在するだけである。從來の經濟學に於て、吾人は一定の社會的目的及び目標を普遍拘束的として立て、又夫れより學的規範を引き出す事が出來ると云ふ意見は、まさしく人々を困難なる迷路に導いたのである。例へは商業政策の學的原則として自由貿易の公準を、諸國民の出來るだけ最とも豐富なる財貨供給の理想から引き出し、或は社會政策の學的公準として、勞働組合の必然性を、一定の社會政策的理想から證明せんと欲する場合に於て、見るが如くである、學は經濟の領分に於ては只諸現象を表示し、彼等の因果的結合からして、彼等は如何に社會生活の一定の歷史的形體內に於て、發達せるかを說明せんとする謙遜なる任務を有するだけである。そうして此の社會生活の規制の一定の仕方を、唯一の學的なるもの、或

は唯一の法則的なものとして樹立せんとすることは、獨斷主義及び形式主義に陷らねばならぬ。社會經濟の一の客觀的に正當なる規制と、云ふが如きものは存在しない。只正當なるものに關する種々なる觀念や、觀想があるだけである。そうして是れは此の領分に於ける材料の見渡し難きことや、或は混雜の大なる事なぞに基因するのでなく(此等の事は實際的な困難にして、學的に之れに打ち勝つことは、必ずしも不可能であるとは云はれない)、つまり認識論的には一般に可能でない樣な問題提出の仕方に基因するのである。蓋し生起するもの、或は生起せるものの如くに生起す可きものを、統一的な仕方にて、學的に確立すると云ふことは、決してなし得られるものでないからである。此くて吾人は自然科學と他の科學との區別に付て、シュタムラーよりも更に一歩進まねばならないのである。吾人は啻に社會生活の自然法則性を排斥するだけに止まらず、更に總ての法則性を排斥せねばならぬ。シュタムラーの認める目的(テロス)の法則性すらも、吾人は之を排斥せねばならないのである。是れ此の目的の內容は、自然の外部的知覺に於けるが如く、決して統一的に把捉され得ないものであるからである。此くて吾人は人間の社會的結合を取扱ふ科學に於ては、常に爲されたるものを研究する立場と、爲さる可きものを考へる立場とを、區別せねばならぬ。只爲されたるものの現象のみが、學的に一義的に確定される得るので、爲さる可きものは評價者の立場に從ふて、隨意に決定されるのである。そうして吾人が依て以て普遍拘束的な仕方

にて、爲されたるものを反社會的として、或は將來のものを社會的に正當として、承認せねばならぬ最上の標準と云ふが如きものは、全く存在しないのである。要するに目的の領分に於ては、學的に統一的な確定と云ふことは、不可能であると思はれるが故に、自然科學に對して、他の科學部類を目的科學と稱するは、適當でないのである。

却說ディールは以上述べ來りし如くに、自然科學に對立する他の科學部類を、精神科學と見ることにも、亦歷史科學や、文化科學と見ることにも、更に目的科學と見ることにも反對するので、そうして之を社會科學と見んとするのである。つまり同氏は科學を自然科學と社會科學とに、區別せんとするのである。然らば同氏が自然科學に對立するものとして觀ずる、其の社會科學の概念は如何なるものであるか。余は次に此の問題を考究し、そうして終りに同氏の科學分類論の全體を、論評することとしたいと思ふ。

(三)　自然科學と社會科學

今ディールは科學を自然科學と精神科學とに大別する說も、亦自然科學と歷史科學や文化科學とに大別する說も、更に自然科學と目的科學とに大別する說も、總て上に述べし如く穩當でないと論じたる後、自然科學と社會科學とに大別する說を、最とも適當なものであるとして立論して居るが、此處に先づ其の見解の大要を述べることとする。

夫れ自然科學とはつまり、人間が外界の過程或は進動を觀察し、說明し、記述する處の總ての科學的領分、此くて人間が認識するが、併し影響を及ぼし得ない結合の取扱はれる、總ての科學的領分を包括するものであるが、之れに對して社會科學とはつまり、人間が能働的に影響を及ぼす狀態及び現象の研究が取扱はれる、總ての科學的領分を包括するものである。但し夫れは技術に於ての如く、單に自然力の利用が取扱はれるのでなく、人間の社會的協働と、此の協働の一定の目的に向けられたる行動とが、取扱はれる限りに於て云ふのである。そうして此の社會科學と云ふ語は、精神科學とか、歷史科學とか、文化科學とか、目的科學とか云ふ語の如く、何等の色彩をも帶びず、中立的にして、しかも自然現象に受働的に拘束される事に對して、能働的な社會的行動の本質的見地を、明々白々に表示するが故に、總ての他の名稱に勝れて居ると思はれるのである。此の人間の社會的及び共同的生活よりして、吾人が文化と稱する總てのものが發現するのである。そしてこの意味に於て社會科學に屬するものは、啻に法學や經濟學のみでなく、言語學、宗教學、歷史學、及び人間の精神的文化の諸般の活動に關する總ての他の科學も、之に屬するのである。此等の活動は總て人間の共同生活を前定とするが故に、各箇人に於ても亦觀察され得る、人間生活の自然的現象に對立するものである。先づ人間が諸般の團結に於て共同的に生活することによりて、文化の可能性が生ずるのである。そうして此の社會的なるものの概念に於て、

文化生活の特有の基礎が與へられるが故に、社會科學と云ふ語は、自然科學の對象との實質的對立を、出來るだけ精確に表示する爲めに、特に適するものであると思はれる。只人間が社會的に活動する時にのみ、宗教、道德、法律、經濟制度及び其他の社會的共同的思想の表現に於て、一切の文化的果實を產出することが出來るので、又之れによりて人間は自然的及び動物的存在から、高等なる文化的存在に己を高めるのである。併し此處に誤解を避ける爲めに少しく辯明して置きたいことは、假令人間を團結に於て取扱ふて居ても、人間の一定の自然的性質を研究する科學は、矢張り自然科學に屬するので、社會科學に屬するものでないと云ふことである。只社會的と云ふことが、社會的活動によりて產出されたるものを意味すると解されるに於てのみ、之を取扱ふ特別の科學として社會科學が成立するのである。此くて例へば社會人類學（ソーチャルアントロポロジー）とか社會衞生學とか云ふが如き學科は、社會科學に屬しないのである。是れ其等の學科は社會的に結合されたる人間を取扱ふが、併し只人間の自然的性質を研究せんとするだけのものであるからである。

オイゲン、フイシエル（Eugen Fischer）は、社會人類學を人間の社會的團體に於ける人類學的現象を研究するものと解して、「あるがまゝに社會團體の生活、生活表現、規則及び法則等を研究するは、是れ社會學的、經濟學的、法學的職分、又歷史學的及び土俗學的職分である。併し其等の學科だけで總ての問題の解決を企だてることは出來ない。人間の團體の社會的共存から生起す

る、其の生活に於ける甚だ多數の問題は、純生物學的、卽ち解剖學的及び生理學的方面を有つて居る」と云ふて居るが、夫れは正當である。

人間團體の研究に於ても亦、自然科學的研究の必要なることは、何人も否むことは出來ない。例へば一定の人種、一定の自然的な遺傳的形質が、其の人種に屬する人々の共同生活の上に、如何に作用するかと云ふ問題の如きにありては、自然科學的研究は必要缺く可らざるものである。そうして其の研究は箇人を對象とするものでなく、一定の地理的範域や、毛の色及び其の他の人種的特性に從ふて包括される箇人の團體を對象とするものである。しかもかゝる研究は社會科學的ではない。是れ其の研究の主題となるものは、人間の自然的形質にして、人間によりて影響され、又作られたる制度ではないからである。社會人類學や社會衞生學は、一定の人間團體を研究するものであるが、しかも矢張り自然科學であるのである。社會人類學が箇々の人種の人種的特性を決定し、又社會衞生學が煙や惡い空氣が、人間の有機體の上に生ずる自然的傷害を研究する時には、其等の研究は社會科學に屬するものでない。只人間の立てたる方策の影響が明らかに認められる場合、立法及び行政の影響が明かに現はれる場合に於てのみ、眞に社會科學的なる考察が可能であるのである。但し自然的方面と社會的方面との影響が屢々相互に交錯すること、兩者を區別するは屢々甚だ困難なることは、明白なる事實である。そうして多くの問題は只社會科學者

と自然科學者との協力によりてのみ、始めて正當に解決し得られるものであることは疑はれない。しかも吾人は自然的存在及び生成を考察するか、又は人間が一定の目的の爲めに作れる人爲的構成物を考察するかによりて、科學の主旨は全く相異なつて居る事を、常に記憶せねばならぬ。

今以上述べしが如くに、科學を自然科學と社會科學とに大別して考へる時は、國民經濟が何れの科學部類に屬するものであるかは直ちに理解される。國民經濟學は人間社會の經濟現象を取扱ふものにして、箇人の經濟的慾望を理解せんとするものでないから、之れによりて其の社會科學的性質は明らかに示されて居る。吾人は國民經濟學に於て、一定の慾望及び一定の自然的衝働を具有する人間が、如何に相互に對して行動するか、又一定の慾望を具有する人間相互の關係からして、如何にして自然的に決定されたる法則が發見されるかを研究せんとするのでなく、一定の社會的團結に於て、又具體的なる社會的制度に基づいて、如何に經濟的生活が展開するかを研究せんとするのである。此くの如く國民經濟學に於ては、吾人はさきに述べしが如き意味にて、社會的生活の一方面を取扱ふ可きものであるから、自然科學的方法に基づいて國民經濟學を建設する可能性は、全く排除されて居るのである。されば自然科學的方法に從ふて、國民經濟學を建設せんとする種々なる企だては云ふまでもなく、之を半は自然科學に屬し、半は精神的及び文化的科學に屬する、一の混分學科であると見るシュツムプの說なども、總て正當でないのである。云

ふまでもなく、經濟生活も總ての他の文化生活と同じく、大に自然的條件に依存するものである。そうして經濟學者は常に之れに注意せねばならぬ。併し之を研究し、組織的に認識せんとするは經濟學の任務でない。例へば土地の報酬遞減の法則は、經濟學者の忘れてはならぬものであ[illegible]して、經濟學は只之を認めて經濟生活の研究[illegible]の任務[illegible]切の[illegible]經濟が一定の自然條件及び自然法則に依存すると云ふことは、決して經濟學を一の自然科學となすものでない。之れに反して、自然によりて一切の人間的行動に加へられる制限内に於て、如何に社會的目的及び社會的努力が遂行され、又遂行され得るかを示すのが、まさしく國民經濟學の任務であるのである。

今上に述べし如き意味にて、科學を自然科學と社會科學とに分類することが、科學の分類として最とも勝れたるものであると思はれる理由は、更に科學を自然科學と精神科學とに大別する人々も、亦之を自然科學と歴史科學或は文化科學とに大別する人々も、亦之を自然科學と目的科學とに大別する人々も、總て科學を何れかの二部類に區別するに當て、何を決定的標準として居るかを深く研究して見ると、夫れはつまり社會(ゲマイン)と云ふ思想(シャフツ ゲダンケ)であることによりて、發見されると思はれるのである。吾人はディルタイに於ても、自然科學の概念に對して、精神科學の概念を確立する爲めに、社會の思想が甚だ重要なる役目を演じて居ることを發見する。又リッケルトの文化科

學の概念に於ても、同一の事實を發見する。而してシュタムラーの目的科學の概念に於ては、社會の思想が其の決定的要素となつて居ることが、最とも明白に現はれて居るのである。

却説デイールの社會科學の概念は、以上述べしが如きものであるが、今之を批判せんとするに當て、尙ほ同氏は社會學の概念を如何に決定せんとするかを考へて置くことが便宜である、或は必要である。是れ同氏が特に「社會科學と社會學」と題する一節を設けて、同氏の見地からして社會學の概念を論じて居るのを見ても明らかである。それで此處に簡單に同氏の社會學論を述べて置く。

デイールの論ずる處によると、先づ社會學の概念は上に述べしが如き意味の社會科學の概念と合致しないで、寧ろ或意味では之れと反對して居る。社會科學は自然的存在に對して、社會的存在を說明せんと欲する、一切の箇別科學の單に總稱である可きものであるが、社會學は其等の箇別科學の外に、又其の上に立つ、一の特別なる科學たらんと欲するものである。そうして其等の箇別科學の外に、一の特別なる科學、卽ち社會學なるものを建設することが、一般に必要であるや否やは、單に合宜の問題である。つまり社會學なるものを建設すれば、社會的存在を理解する爲めに、然らざる場合よりも一層有益或は便宜であるや否やと云ふことが問題である。然るに社會學の現狀に於ては、此の合宜問題を判定することは甚だ困難である。是れ社會學の體系は種々樣

々にして、そうして斯學の目的及び本質に就てさへも、其の專門家の見解の間に殆んど一致する處がないからである。併し大體上から見て、今日の社會學の方針を二つに分類することが出來ると思ふ。一は事實上社會科學的地盤に止まりて、社會現象を研究せんとするもの、例へばジムメルの社會學に於て見るが如く、社會化の形體を研究し、人間の社會的關係から生起する現象を、說明せんとするものである。二は單に人間團體の社會的現象を研究するだけに止まらず、更に人類發達の全體を研究し、其の自然法則を發見せんとするものである。

然るに第一の方針に於ては、社會學と云ふが如き特別なる學を建設する必要はないと思はれる。ジムメルの社會學に付て云へば、社會化或は箇人の一切の相互作用は、內容上から見れば經濟的、法律的、宗教的、藝術的諸領分が或は其の他の文化領分に屬するものである。而して形式的に見れば、夫れは團體的と云ふことを、其の標準となす可きものであるが、然るに今日既に箇々の特殊學科に於て、其等の社會的結合を研究し、分拆するに充分なる機會がある。是れ吾人が今日既に法理學、宗教哲學、及び歷史哲學等に於て見る處のものである。尙ほ其等の社會化內に於ける一般的傾向に關して、吾人の獲得し得る一般的性質の總ての知識は、心理學、倫理學或は其の他の哲學的學科の如き諸學科に於て、研究され得るのである。要するに社會學が第一の方針に於て、是れまでに提出せる總ての問題、及び是れまでに行なはれたる總ての社會學的箇別研究

は何等の困難なしに、今日存立する箇別學科中に攝取されるので、甚だ相異なれる社會科學に屬する社會化の總ての問題を、包括的に取扱ふ理由或は機會は尙ほ存在しないのである。而して第二の方針に於ける社會學は、つまり人類の發達全體に於ける自然法則を發見せんとするもの、卽ち社會生活の自然科學を建設せんとするものであるが、然るにさきに述べし如く、社會生活には自然法則は存在し得ないのであるから、かゝる社會學の成立する可能性は全く存在しないと云はねばならないのである。

（四）批判的考察

以上述べ來りし處によりて、余はデイールの社會科學の概念を、かなり詳しく說明したと思ふが、是れより同氏の說を批判的に考察して見たいと思ふ。先づ同氏が他の科學分類說に加へたる批評、卽ち自然科學と精神科學との區別に關するデイルタイの說や、又自然科學と歷史學や文化科學との區別に關するリツケルトの說や、自然科學と目的科學との區別に關するシユタムラーの說等に加へたる批評を概觀すると、其等の諸說に關する同氏の理解の充分でない事を感じざるを得ないのである。そうして夫れは結局哲學と科學との區別に關して、同氏が明確なる思想を抱いて居ないが爲めであるかと思ふ。併し此處に諸家の科學論に對する同氏の批評までも詳しく論評して居る暇はないから、直ちに同氏の社會科學の概念を批判することとする。

今デイールの自然科學と社會科學との對立を、批判的に考察せんとするに當て、吾人の先づ注意す可きは同氏の自然的のもの及び社會的のものの概念である。上に述べし處によりて知られる如く、同氏は方法の上から科學の分類を企だてるのでなく、只對象の上のみから之を企だてるのであるから、同氏の科學分類の正しきや否やは、一に同氏の科學の對象の分類が正しきや否やによりて定まるのである。そうして同氏の自然或は自然的のものと云ふは、つまり人間が其の上に作用し變更することの出來ない、只受働的に認識するだけのものを意味し、之れに反して社會的のものとは、つまり人間が彼等の協働によりて、能働的に其の上に作用し得るものを意味する。併し吾人は果して右の如くに單純に、自然的のものと社會的のものとを、區別することが出來るであらうか。全體人間が或物の上に作用を及ぼし、之を變更すると云ふことが、學的意義を有するには、夫れは人間が意識的計畫的に作用することを意味しなければならぬ。人間が只本能的無計畫的に行動することは、假令夫れによりて或物が、大なる影響を受けたればとて、吾人は之を人間の働きによりて、生じたものと云ふことが出來ない。そうして右の點に注意して考へると、吾人は先づ自然的のものは人間の作用を受けて、變更されるものであることを見る。實に人間が自然を征服し、支配することが文化の本質であるとも云はれて居るのである。之れと同時に又人間の協働が本能的無計畫的にして、其の産物が無意識的無計畫的な結果である場合、即ち社會が自

然的に成立し、變動し、自然的な結果を生ずる場合のあることも明らかである。社會の中には自然的社會と稱せられる程、人間の意識的計畫的努力と關係のないものもあるのである。要するに人間の協働或は社會は、悉く意識的計畫的に生成し、變動するものでなければ、又其の協働の結果、社會的產物が、悉く意識的計畫的產物であるのではないのである。そうして人間の無意識的無計畫的協働は、假令人間の協働であつても、夫れは矢張り自然的のものにして、人間の作れるものとして見られる社會的のものではなく、又夫れより生ずる無意識的無計畫的結果は、人間の協働の產物であるが、夫れは矢張り自然的產物であつて、人間の作れるものとして見られる、社會的產物ではないのである。

されば實在をディールの云ふが如き意味にて、實質的に判然、自然的のものと社會的のものとに區別することは出來ないのである。實在はディールの云ふが如き意味にて、自然的のものと社會的のものとして、判然相對立する二つの部類に分れて居るのでないのである。そうして同氏が社會的のものと稱するもの中にも、卽ち人間の協働や夫れより生ずるものの中にも、同氏の云ふ意味にて自然的のものと認めねばならぬものもあるのである。要するに余はディールの云ふ自然或は自然的のものの概念は、今日一般に承認されて居るものであるが、併し夫れは實在の見方であつて、同氏の考へる如く一定の實在は只自然として見做されるだけであると同時に、一定の

實在は全く自然とは見做されないと云ふ意味に、解さる可きものでないと考へるのである。同一の實在にして自然的と見做される方面を有すると同時に、又自然的でないと見做される方面をも、有して居ると考ふ可きである。つまり人間の力から獨立しておのづから生成し變動すると見做されるものは總て自然的であるが、併し同一の實在にして此の如き意味にて自然的と見做されると同時に、又自然的でないと見做されるものは少なくないのである。否な實在の總てはそうであるとは云はれなくとも、實在の大部分はそうであると云ひ得るのである。そうして社會的のものも亦、之を自然的のものと見做し得る方面を有つて居る。卽ち一方から見れば、總て社會的のものは自然的のものであると云ひ得るのである。されば實在の自然的と見做される方面に對立する方面は、之を社會的と稱することは正しくないので、吾人は他の語を以て之を云ひ表さねばならぬ。そうして之を精神的と云ふことも、若し此の語を一定の意味に限定して用ゆれば決して不適當ではないが、併し精神的と云ふ語は色々な意味に用ひ得られるから、此の語を用ひて自然的の方面に對立する方面を云ひ表はすことは、種々なる誤解を生ずる恐れがある。そこで今日は文化或は文化的と云ふ語を以て、其の方面を云ひ表はさんとする傾向が、一般的になりつゝあるのである。併し文化と云ふ語も亦矢張り、色々な意味に解されて居るから、此の語も決して滿足なるものであるとは云はれない。されば嚴密に云へば、實在の自然的方面に對立する他の方面を、

只消極的に非自然的方面と稱するより外に、適當な仕方がないと云はねばならないのであるが、しかし又何等かの語を用ひて、之を積極的に云ひ表はさねば、吾人は滿足することが出來ない。そうして强いて之を積極的に云ひ表はさんとするに於ては、余は文化と云ふ語が、比較的に適當であるかと考へ、余も亦此の語を用ひて居るのである。但し此の場合に文化を廣義に解し、人間の意識的計畫的努力から獨立して、おのづから生成し保持し、變動するものを、總て自然と稱するに對して、人間の意識的計畫的努力によりて形成せられ、保持せられ、變更されるものを、總て文化と稱するのである。此くて自然或は自然的とは、人間の努力から獨立しておのづから生成し、保持し、變動する實在の方面にして、文化或は文化的とは、人間の努力によりて形成せられ、保持せられ、變更される實在の方面であるのである。

余は右に述べし如くに、實在の自然的方面と文化的方面とを區別し、此くて實在を認識し、理解せんとする人間の意識的、組織的、計畫的努力としての科學を、其の對象の上から見て、自然科學と文化科學とに大別するのである。そうして余の此の見解はリッケルの說に基いて立てられたるものであるが、然るにリッケルトは科學を對象の上から見て、自然化學と文化科學とに分類するのみならず、更に方法の上から見て、之を自然科學と歷史科學とに區別せんとするのである。卽ち同氏は實在を普遍化的に認識せんとするものを自然科學と稱し、之れに對して實在を個

性化的に認識せんとするものを、歴史科學と稱するのである。但し同氏の實在を普遍化的に認識すると云ふのは、つまり箇體を類概念に攝取し、之れに夫れ自身獨立の意義を認めず、之を類概念の見本として把捉することを意味し、之れに對して實在を箇性化的に認識するとは、つまり箇體に夫れ自然獨立の意義を認め、之を普遍價値に結びつけて、或は關係させて、其の獨立の意義を究明することを意味するのである。併し余は此の點に於てリッケルトと見解を異にして居るので、余は科學とは總て實在を概念的に或は普遍化的に認識せんとするものにして、箇體を理解すると云ふことが、箇體の夫れ自身獨立に有する意氣を究明すると云ふことを意味するに於ては、夫れは卽ち哲學の任務の一であると考へるのである。此くて余の科學論の主旨を明らかにする爲めには、此處に少しく余の哲學概念に付て述べて置かねばならぬ。

余は哲學の概念を決定するに付ても、大體上リッケルトの說に從ふて居るのであるが、今余は實在とは經驗的のものにして、超經驗的或は超越的な實在と云ふが如きものは存在しないと考へる。併し夫れと同時に又、超驗的なもの、或は超越的なものとして、絕對的に妥當するもの、卽ち絕對的價値の存在するを認める。そうして絕對的價値が實在と結合するに於て、此處に實在の意義が生ずると考へるのである。要するに意義とは實在に付て云はれるのであるが、併し實在は夫れ自身で意義を有するものでなく、之れに絕對的價値が結合するに於て、此處に其の意義が生

ずるのである。そうして余は實在及び絶對的價値の本質を究明し、又絶對的價値が實在に結合することによりて、實在の意義の生ずる原理を究明するのが、即ち哲學の根本的任務或は普遍哲學の任務であると考へ、又夫れ夫れの實在の部類に付て、夫れ夫れの絶對的價値の結合、即ち實現、つまり其の實在部類の意義を究明するのが、つまり夫れ夫れの特殊哲學の任務であると考へるのである。尙ほ余は總ての絶對的價値が、人類の歷史的生活全體に於て實現する具體的形態を、總括的に考究するものを、歷史哲學と云ふのである。然るに絶對的價値の實現、或は實在に結合すると云ふことは、箇體に於て行なはれるので、全體に於ける價値の實現と云ふが如きものはない。一の全體が意義を有するとは、つまり夫れを一の箇體と見て云ひ得られるので、全體としての全體には意氣はないのである。此くて箇體の夫れ自身獨立の意義を究明すると云ふことは、つまり特殊哲學（歷史哲學をも含む）の任務であるのである。

余は以上述べし如くに、哲學と科學との區別を立て、そうして科學とはつまり實在を普遍化的に或は概念的に認識せんとするものであると考へるのであるから、方法の上から見てリッケルトの立つるが如き、自然科學と歷史科學との區別を、認めないのである。此くて余は科學は方法の上から見れば、總て普遍概念を究明し、法則を確立せんとするものであると考へるものである。而して余の概念或は普遍概念と云ふは、つまり類概念を意味するもの即ち類の箇體の總てに共通す

る、一般的共同的諸性質の總體を意味するものにして、又余の法則と云ふは、類の一般的共同的諸性質間に存する因果關係を意味するのである。然るに法則には大體上二種の別を立てることが必要であると思ふ。其の一は類の共同的諸性質間に存する普遍必然的なる因果關係、卽ち類に屬する總ての箇體の何れに於ても、必ず實現される因果關係を意味する法則にして、余は之を自然法則と稱す。其の二は類の共同的諸性質間に存する大體上の因果關係、或は大數的因果關係、卽ち類に屬する總ての箇體の何れに於ても、必ず實現されると云ふのではないが、併し其の多數に於て實現される因果關係、或は全體の上から見て實現されると認められる因果關係を意味する法則にして、余は之を傾向法則と云ふ。但し余はまだ因果關係が確證されて居ないが、併し經驗上證明されて居る大體上の共伴關係をも、傾向法則の概念中に含ませるのである。是れ余は共伴關係は因果關係の發見の前階段にして、結局は因果關係として確立さる可きものと考へるからである。

今右に述べし余の科學論から見ると、デイールの自然科學と社會科學との區別は、方法の上から見れば、つまり余の自然法則と稱するものを確立せんとする科學を自然科學と稱し、そうして余の傾向法則と稱するものを確立せんとする科學を、社會科學と稱することになるのである。併しさきに述べし如く、デイールの解する意味にて、自然科學に對立する科學部類を、社會科學と稱するは正當でない、少なくも精確でないのである。余は之をさきに述べしが如く、文化科學と稱

する方が正しい、或は少なくもより精確であると考へるのである。併し夫れは別段に重大な問題ではないとしても、余はディールの如く、法則と云へば總て自然法則を意味するものにして、余の傾向法則と稱するものを法則でないと見做し、そうして同氏の社會科學と稱するものは、全く法則の確立に關係のなきもの、或は法則を排斥するを以て、其の自然科學に對立する特徴と見るは穩當でないとる考へのである。同氏が社會科學が確立するを目的とすると云ふ規律性或は發達傾向なるもの、卽ち余の傾向法則と稱するものは、認識論上根本的には自然法則と區別されるものでなく、矢張り一定の範域内に於ける、一般的な因果關係を意味するものである。されば認識論上、法則の確立を目的とする自然科學に對立する、他の科學部類を立てんとするに於ては、夫れは本來因果關係とは根本的に性質を異にする、他の關係或は結合を確立することを目的とするもの、卽ちデイルタイの云ふ精神科學や、リッケルトの云ふ歷史科學や、又シュタムラーの云ふ目的科學の如きものでならねばならぬ。デイールの云ふが如き社會科學は、認識論上自然科學に對立するものでなく、其の一種と見做さる可きものである。要するにデイールはデイルタイやリッケルトやシュタムラーなぞの科學分類論を批評しながら、しかも尙は充分に其等諸家の說の眞義を、理解して居ないのではないかと疑はれる。

終りに余はディールが、シュタラムーの社會科學の概念から、目的論的見地を排斥して、經濟

學をシュタラムーの云ふが如き目的科學としではなく、同氏自身の云ふ社會科學として建設せんとすることは、經濟學上結局何等新しき貢献をなさずして終るのではないかと思ふ。余はシュタラムーの目的科學と云ふは、結局哲學として精練さる可きもので、科學ではないと考へるが、しかも同氏の云ふが如き目的科學として、實際上經濟學を建設せんとすることは、經濟學の研究の現狀から見て大に意味あることと思ふ。即ち經濟の哲學的研究の發達上、重要なる意味を有すると思ふ。然るにディールの如くに、目的論的見地を排斥し、同氏の所謂社會科學として、之を建設するに於ては、同氏は種々辨を弄して居るに拘らず、同氏の經濟學は結局歷史的經濟學の一種に過ぎざるものとなり、經濟學の發達に對して、特に新しき貢献をなすことなしに、終るのではあるまいが。余は同氏の豫告されて居る如くに、其の經濟學本論の諸卷が續々公にされんことを希望し、又其等の諸卷が公にされた上にて、改めて再び論評を試みたいと思ふ。（完結）